
めだかボックスのおはなし

キイナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めだかボックスのおはなし

【ZPDF】

Z0817X

【作者名】

キイナ

【あらすじ】

ふしきなふたごのおはなし。

『普通』（前書き）

キイナ。

『普通』

双子だった。

生まれたのは双子だった。

男女の双子だった。

女の子の方は髪と眼の色が、黒がかかった茶色のような微妙な色をしていた。

男子の方は髪と眼の色が、茶色がかかった黒のよつた微妙な色をしていた。

微妙微妙と言うけれど、その双子自体は普通だった。

普通で普通な普通の双子。

特別普通という訳ではなかった。

世界中の誰もが普通と答えるであろう。

そんなものだった。

普通に普通。

だけど。

世界中の誰もが。

何かが異常おかしいと答えるだらう。

『普通』（後書き）

作者、キイナ。
中一女子。

『ただただ愛した。』（前書き）

一話から最終話までのあらすじは全て頭の中。

考へる必要は、無い。

『ただただ愛した。』

双子の母親は双子を愛した。

おかしい
異常事など気にせず。

ただただ愛した。

普通の母親なら、『捨てる』といつ考えも浮かんできたかも知れない。

しかし、双子の母親は。

その考えこそが異常と思つっていた。

だから愛した。

ただただ愛した。

ある日、母親はふと考えた事があった。
それは。

子供の将来であった。

もじの異常のせいで、トモダチがいなくなってしまったなら…。

もしりの子達が孤立してしまつたら…。

それが母親の最大の悩みであつた。

『ただただ愛した。』（後書き）

トモダチって何？

『色々な人』

双子は一歳になつた。

母親はある決心をした。

病院に連れて行こう。

別に異常だからでは無かつた。

やはり双子の事を心配し、連れて行く事になつたのだった。

その病院は普通では無かつた。

そこは、『異常』な子供が集められる医療機関。

『異常性』が何のためにあるのかを検査するための場所。

双子は。

そこで色々な人に出会ったのであった。

待合室。

双子は仲良く絵本を読んでいた。

女の子の方はこじこじと笑いながら男の子と一緒に絵本を読んでいた。

男の子の方は冷静的な表情を浮かべていた。

待合室では、紫の髪をした女の子と、双子と。

氣味の悪いボロボロのつれぎのぬごぐみを持った白髪の男の子が並んで座っていた。

『色々な人』（後書き）

異常とか、過負荷とか。

2つも作らない。

だって、異常とかは能力じゃ無い。

2つもあつたら人格が2つあるということ、だから。

『それは違うよ』

紫の髪、と言つよつ紫に見える黒い髪色だった。

その子は何かが待ち遠しいような。

そんな表情をしていた。

その時。

『まつたく』

『なんのためだなんて』

『みんな大人のくせに』

『的外れだよねえ』

白髪の男の子だった。

紫の髪の子も、双子も。

その白髪の男の子に注目した。

それもそうだった。

変わった喋り方だと全員が思った。

『人間は無意味に生まれて』

『無関係に生きて』

『無価値に死ぬのに決まってるの兀』

『めだかちゃん?』

『きみもそう思つだらうつへ、』

『えーと』

紫の髪の子の事を聞いたのであります。

『やりと気持ちの悪い笑みを浮かべながら丘髪の男の子は言った。

紫の髪の子は、少し驚いたのか、口を開けて聞いていた。

「球磨川くーん」

「5番検査室に入つてくれるー？」

看護師の声に応えるように、丘髪の男の子は立ち上がった。

『カツ、とボロボロのわざのぬごぐみが椅子から落ちた。

『きみもきっとこっぽい人を「終わらせ」ここに来たんだよね』

『いいんだよそれで』

『僕やきみはなこをしてもらいたいんだ』

『だつて世界には田標なんてなくて』

『人生には目的なんてないんだから』

『ずるずるとぬいぐるみを引きずりながら去つて行くのを、紫の髪の子は、なにかに惹きつけられるようにして見つめていた。』
その時。

「それは違うよ」

双子だった。
双子の一人、女の子の方だった。

「意味あるよ」
「意味がある事だってあるもん」

『…。』

「田標だって目的だって、あるもーん…」
「ひりひり」

もう一人がツツ「ミ」を入れなければ、きっと永遠に同じ事を言つて
たであろう。

『じやあ

『どんな田標や田的があるって言つんだい?』

「それは自分で考えなさい。」
「ちょっと、それは無いよ」

「球磨川ぐーん?」

『ああ、呼んでる』

『行かなくひや』

『逃げるなー』

「こーらー」

『そんな事言つて』

『本当はさみもわからなーんでしょう?』

『なにッ!?』

『はー静かにー』

「わかんないなー、考えればいいんだよー。」

『…じやあね』

「あーーーひよーと待…」
「いい加減にしなよ」

「陰陽日陰ぐーん、陰陽日向ひやーん」

「あ、呼ばれた」

「ほら、行くよヒナ」

「めだかちゃんかな？わたし、日向ーーひむちはカゲくん…じゃないや、日陰つていうんだーよろしくねー」

「よろしくーー」

「…。」

「さて、行こーー！バイバイ！」

「バイバーイ」

強引に自己紹介されためだかは、動けなかつた。

これが、陰陽日陰、日向、黒神めだか、球磨川楔が出会つた時だつた。

『負けないで』

日陰と日向が看護師について行く時に、「球磨川」と呼ばれた男の子とすれちがつた。

二人は全くといっていいほど気にしなかつた。

それが意外だつたのか、すれちがつた瞬間、「球磨川」と呼ばれた男の子は振り返つた。

否、
振り返つてしまつた。

二人にとつては、用も無い相手を気にする事などなかつた。

それほど、「球磨川」は一人に普通と見られていた。

ただ、氣味が悪いだけの、普通とは見られていた。

二人が診察室の様な場所に入ると、いかにも小学生らしき少女が椅子に座つていた。

「えーと、こんにちはーーわたしは、陰陽田向ですーー」

「ぼくは、陰陽田陰です。よろしくお願ひしますーー」

「よろしくねー田向ちゃんに田陰くんー」

「私は担当医の人吉瞳。こう見えても子供がいるのよん
人吉瞳は、こう見えても子供がいる。

「えつ。先生お子さんいるんですか?男の子ですか?女の子ですか
?仲良くなりたいなー」

「男の子よー。是非仲良くしてね
「へー。ぼくも仲良くしたいです」

人吉瞳は焦っていた。

初めてだつた。

異常ではない異常おかしさを見るのは。

「田嶺くん、田向ちゃん。あのね」

「え、なんですか？ 私わたしなんでも聞きますよ、ね、カゲくん！」

「はい」

「やひ、じゃ、聞いてくれるかしり」

「あなたたち一人、これから何があつても負けないで」

「え…？」

訳がわからないといった表情で、オロオロとする田向。

田陰は、至つて冷静な表情だった。

「あなたたちには、何かがある。その何かが、まだわからないのだ
けど」

「だけど、絶対負けないで。いい？」

「…はい…」

「やつが。よかつた！これで診察はおしまいなんだけど、そうだな…。お母さん、呼んできてくれるかな？」

「やしたら終わりよ」

「はーいー…」

「やめうなりー…」

「やめなーりー」

一人は元気よく診察室から飛び出して行つた。

『雰囲気だ。』

二人が出て行つた後、人吉瞳は考えていた。

二人の事を。

そつくりそつくり。

二人ともすごい外見似てるよねー。

でも何か違うな。

髪と眼の色？

目つき？

日陰くんの方がちょっとクールな目つきしてるよね。

あ、そつか。

そこには、可愛らしい少女がいた。

人吉瞳は振り返った。

「あ。 ありがとうございました。 でも、お母さんだけでよかつたんだけど……！」

雰囲気だ。

雰囲気がちょっと違うかな。

「せんせー！ 人吉先生！」

「連れてきましたー！」

「え？……。田嶋くんと田町ちゃんの、お母さんですか……？」

「はー。私が、この子達の母の、陰陽陽差《ひやうし》です」

につこりと微笑みながら少女…否、陽差は言つた。

栗色のカールした長い髪。

どうかがりつみでも、中学生くらいの少女であった。

「あ、日陰くん日向ちゃん。待合室で待つてくれる?」

「はーい」

「さて、何から聞い「うかしら…。まあ、あなた年は?」

「あ、18です」

「18……」

「「」みんなさい。私、こんなにちつちやくて。一人も将来ちつちやくなつたらどうしようとか。思つてゐんですけど」

「あら、大丈夫よん。ちつちやいほうが可愛いもの」

「そうですかね~」

二人はそんな会話をしながら、だんだんと本題に入つていった。

『私の子供ですか…』

「あの一人の『何か』には、あなたは気づいてた？」

「はい」

「あなたは、どう思ひます？」

「…………」

「私は

「私はあの子達に何があったって、私の子供ですか…」

狭い部屋に声が少し響く。

「ん、合格。よかつたわ。……しづまへは通院してもいいんだとい？」

「はい。大丈夫です

「それじゃ、今日はもう終わりよ。また後日、ね」

「ありがとうございました」

あの幼さがまだ残る若き母親に、一人を任せるのが不安だった。

しかし、若き母親の覚悟を、人吉瞳は感じていた。

しばらくは、大丈夫よね……。

そんな事を考えながら、人吉瞳は次の診察の準備をしていた。

次の診察が、

一生忘れられない診察になるとも知らずに。

『高校生だよ?』

「ヒナリーまだー？」

「うーん、ちがうじゃねーかー。」

「入学式遅れるよー！」

「何？」

「……………」

33

「入学式長かつた…………」「みんなそんなもんだよ。だって高校生だよ～少しはしっかりしなよ」

半ば呆れた様な顔をしながら日陰はため息をついた。

「そ、そんな事より教室いこーつ！」

「誤魔化すな」

二人が入学したのは、 箱庭学園という、 それはもう素敵すぎるほど学園だった。

とても広い敷地。

設備は十分に完備されており、さうした時計台まであった。

その学園には、1組から13組まであり、13組の生徒は登校義務が免除されている。

なにせ、13組の生徒は全員が、^{アブノーマル}異常なのだ。

さうことは、^{ノーマルベーシャル}普通特別と分けられていた。

もちろんあの双子が、そんな事を知っているわけがなかつた。

『俺は人吉善吉。』

「えーっと…………」

日向は明らかに動搖しながら言った。

「見えない…………！」

「背が小さい事を恨むよ…………」

日陰が答えた。

たしかに一人の背は、ものすごい低い。

そのせいで、クラス分けの紙が見えなかつた。

「しょーがない。人がいなくなるまで居よっか

ため息をつきながら座り込む日向。

その時。

「おっ、何してんだ？」

見慣れない男子生徒が居た。

「んー？背が低いから紙が見えないの。人がいなくなるまで待ってるんだー！」

拗ねた様な表情で、日向は『背が低いから』の所を強調して言った。
「そんな事してたら遅刻するぜ。俺が見てきてやるよ」

「えー？ほんとーー？」

「ああ、名前教えてくれや

「私は陰陽日向ーー！で、ーーが田陰だよーー！」

「双子か？よく似てるなー。田つきのせいでだいぶ印象違うな

「カゲくん暗いー
「見た目だけ」

そうしてその男子生徒は人混みを突き抜けてクラス分けを見に行つた。

「おう、俺と同じクラスだぜ！」

「ほんと！？へー、すごいねー！」

「てゆーか早く行こうよ。遅刻するよー。」

「ああ、分かつて、俺は人吉善吉。よろしくなー！」

「善吉……………ー？」

「善吉……………」

「うん？…どうした？」

「なんでもないよ…。ほりう、早くいこー。」

「お、おう！」

そうして三人は教室へ向かつて行つた。

『そんな印象に残る事では無かった』

入学式の日。田の夜、田向と田陰は自分達の部屋で「ロロロロしながら漫
画を読んでいた。

「うへん…………。ちえ、轟君。覚えてないのかなあ…………」

田向がぶつぶつ呟いていた。

「じょりがなこよ。むへ、ずへと前の話なんだから、ね

『じょりと廻りをひつて、田向は枕に顔をひざめた

「まあ、そんな印象に残る事では無かったしね…………」

寂しそうに語る田向を見て、田陰が。

「うそ、氣にしない氣にしない

「うへん…………」

「やつぱつ氣にするなあ…………」

「え、何?ヒナ、善吉の事好きなの?」

「それは無い」

「ず、随分あつさつ…………だね…………」

その夜、一人はいつもより早く寝た。

『頑張るね。』

「世界は平凡か?」

「未来は退屈か?」

「現実は適当か?」

「安心しき」

「それでも」

「生きる」ことは劇的だ。」

「いや、安心はできないでしょー。ゲキテキなんだから

田向が小声で茶々を入れる。

「いいんだよ、そーゆー」とは気にしないでー

それを日陰が制す。

いつもの日常だ。

「そんなわけで本日より、この私が貴様達の生徒会長だ

置いてあるプレートに書かれた文字、『生徒会 会長
めだか』。

「学業・恋愛・家庭・労働。私生活に至るまで」「
『悩み事があれば迷わず日安箱に投書するがよい』

ものすごい偉そうな態度で、『生徒会長』は言つ。

黒神

「24時間、365日」

「私は誰からの相談でも受けつけぬ……。」

「おお～。頑張るねえ。めだかちゃん」

田向がニヤニヤしている。

田陰はそれを、非常に冷たい眼で見ていた。

『あー。』

一年一組。

普通達の教室。
——

教室内は、『あの』生徒会長のせいでザワザワとしていた。

生徒達の噂話を楽しそうに聞いている女生徒がひとり。

「しつかしあのお嬢様！全校生徒を前によくあんな啖呵が切れるもんだよねー！人前に立つのに慣れてるつーかさー」

「カツー。」

その時、それまで机に突っ伏していたひとりの生徒が体を起こした。

「ありやあ人の前に立つのに慣れてんじゃねーよ」

「『人の上に』立つのに慣れてんだよー。」

『うしょくも無さげ』と言つた感じに『うしょく』の生徒一人と、人吉善吉である。

「んー。あー、そりやそーだね。そーでなじやーー一年生で生徒会長になんか、なれっこないかー」

そしてこのせよほせよほと意味不明な効果音を出しているのが、不知火半袖。

善吉の親友である。

「それも支持率98%！ぶつちぎりのナンバーワンだもんねー！」

「かくゆう、あたしもあのお嬢様に清き一票を捧げたわけですが

不知火は、次々と生徒会長の説明をしていく。

「全国模試では常に上位をキープ！」

「偏差値は常識知らずの90を記録しー！」

「手にした賞状やトロフィーは数しれず！」

「スポーツにおいてもあらゆる記録を総なめ状態！」

「実家は世界経済を担う[冗談みたいなお金持ち]」

「全長263・0メートル、高度6万フィートをマッハ2で飛行！
インテル入ってる！」

「いや、途中から人類じゃなくなってる……」

止まらない説明を止められるのは善吉だけなのだ。

「で？人吉はビーすんの？」

「あ？」

「お嬢様が当選したってことは、とーぜん人吉も生徒会に入るわけ
なんでしょう？」

ガタツと立ち上がりながら善吉は言い切る。

「カツ！」

「んなわけねーだろー！」

「確かにしつこく誘われちゃーいるが、これ以上あいつに振り回されてたまるかってのーー！」

「俺は絶対！生徒会には入らないーー！」

ビシッと指を指しポーズを決める善吉。

その後ろには。

同じポーズをしている生徒会長、黒神めだかがいた。

不知火の時が止まる。

「まあまあ

「そうつれないと云つものではないぞ善吉よ」

「一...?」

善吉の頭は、がっしりとめだかの手に掴まれていた。

その間に割つて入ったのが。

「あー。めだかちゃんだー」

「ほんとだ」

田舎へ田舎である。

そんな事を無視するかのように響いたのは、善吉の絶叫だった。

『変わった趣味だな』

箱庭学園、生徒会室。

めだか達はそこにいた。

「…………つたぐ、普通に連れてくるつてことができるねーのかよ」

「生徒会長さん！」

めだかに引きずられ連れてこられた轟君が呟つ。

「ふん、私の誘いをすげなくし続ける貴様が悪い」

「それに…よそよそしい呼び方をするものではないぞ。昔のよつて、めだかちゃんと呼ぶがよい！」

凛とした態度で微笑むめだか。

説明しておくと、箱庭学園における生徒会は通例、会長・副会長・書記・会計・庶務と、構成されるのだが。

何せ支持率98%の生徒会長である。

同格の生徒などいそうにいるわけもなく。

全業務を会長一人で執行しているのが現状だ。

めだかの左手に五つの腕章全てがはめられているのは、そのためだ。

「カツー！そりゃキツイのはわかるけどな！だからって俺を巻き込むなよ！」

善吉が話している側で、めだかは鏡の前で着替えた。

「お前つて奴は昔からいつもなんだ……」とある、「……」と、当然のよつに俺を道連れにする。「

めだかはすでに下着だけになっていた。

「俺の気持ちとか、俺の迷惑とか、ちつとも考えててくれねえ！付き合いくれねーんだよ、実際！」

さらにめだかは扇子を取り出し鏡の前でポーズを取る。

「大体！お前なら一人で生徒会業務をやり続けることもできるだろ

..... つて、いつかは――二つ――。」

「あつ、当たり前みてエに人の後ろで着替えてんじやねエよーーお前はもつと恥じらいという概念を持って！」

ガタガタと椅子にぶつかりながら後ずさる善吉に、めだかは不思議そうに言った。

「何故だ？私と貴様の間に恥じらいなど、何の意味がある」

「少なくとも、小六まで私と一緒に風呂に入つてた男の話」とではないな

「昔の話だ……」

衝撃的な告白をしながら誇りしげに語るめだかに、善吉は顔を赤くした。

「それに善吉。私は仕事を手伝つても、もうつために貴様を引き込もうとしてるわけではない」

「ああ？」

「私は生まれてこのかた一度も、仕事がキツイと思ったことなどない

「私に貴様が必要だから、そばにいてほしいだけなのだ

「……」

善吉は、さりに顔を赤くした。

「……あ、ああ！？」

「所で……」

めだかはチラリと横を見る。

「貴様たちは誰なのだ？」

「あ～、気にしないで～。私たちはただ見てるだけだから～」

「そういう訳にもいかない。私と善吉のこのやうどりをずっと見るのが趣味なのか？随分と変わった趣味だな」

「うわ～…。今ちゅうとトイレに来た…」

「わあ、召乗るがよー」

「あー。私は陰陽田回。」うわは陰陽。はーおしまー

へいへいと笑ひ田回。

その横で表情を変えずにじっと立つてゐる田陰。

「なるほど……田回……田陰……か

「もししくね、めだかちゃんー。」

その頃、一年一組では。

「あれ？人吉の奴どこ行った？」

人吉の机にはぬいぐるみが置かれていた。

「やあ 田向クン。人吉はねー。さつきこわーい生徒会長さんに連れ
てかれちやつたんだよん 」

「な、なるほど……。そーいやなんか選挙活動も手伝つてたみた
いだけど、人吉と例の新会長つて、どういう関係なんだ?」

「あー。いわゆるひとつめの幼なじみつて奴ですよ」

「ま、あたしに言わせりやただの腐れ縁なんだけどね
」

『変わった趣味だな』（後書き）

2、3作目も出す。

この話とは関係ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0817x/>

めだかボックスのおはなし

2011年11月26日19時57分発行